

ジョージ・マクドナルドの *The Light Princess* における 〈生贄〉 のテーマ

山田 敦子

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Theme of Sacrifice in *The Light Princess* by George MacDonald

YAMADA Atsuko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

George MacDonald (1824-1905), a British writer of the 19th century, is a forerunner of today's fantasy literature. The aim of this thesis is to investigate specific quality in his newly created work based on one of the main biblical themes. The theme is sacrifice in *The Light Princess*. It is central idea in both the Old Testament and the New Testament. In this work, MacDonald tried to persuade us that body and soul cannot be separated on the supposition that the Princess has been deprived of her gravity. This application of scientific idea to his work is original, thereby he succeeded in making the invisible visible.

1.はじめに

ジョージ・マクドナルド(George MacDonald, 1824-1905)は、今日のファンタジー形式を創出した作家として知られている。「彼は、牧師職を己が天職と考えていた。だが、異端的見解に対する教区民たちの否認によって牧師職を辞任せざるを得なくなったとき、彼は自分の作品を説教壇の代わりとして用いようとした¹。」19世紀は民話や神話に関心の高まった時代であり、彼も時代の思潮の波に乗り、民話や神話を活用して彼独自のキリスト教的世界観を物語ろうとした。彼は、彼独自の想像力で民話や神話に変容を施すことによって新しい物語形式を創出し、彼の思想を作品に織りこんだ。本論は、彼の作品の材源とその変容、想像力の特質を *The Light Princess* (1864) に焦点を当てて考察するものである。

2. *The Light Princess* のプロット

むかし、ある国に長い間子どもが授からない王さまがいた。やっと王さまに女の子が授かり、王さまは自ら命名式の招待状を書いた。だが、王女の命名

式の日には事件は起きる。王の姉が命名式に呼ばれなかったのである。姉は呼ばれなかった腹いせに、王さまの大切な王女の体から重力を奪う。重力を奪われた王女は、心の働きまでも失ってしまう。王女はふわふわ浮きながらたえず笑っていた。将軍が八つ裂きにされたという残酷な話を聞いても声をあげて笑うだけだった。母の嘆き悲しむ顔を見てもキャッキヤと笑うばかりであった。唯一、湖に入るときだけ王女は重力を回復できた。それを知った王の姉の魔女は、蛇に湖の水を飲み干させてしまう。

その頃、森に迷い込んだ一人の王子がお城の近くに現れる。王子は湖で姫に出会い、強く心を奪われる。一方、湖の水は蛇に水を飲み込まれてどんどん減っていった。国には雨も降らなくなり、国から水がなくなってしまった。そのとき湖の底から「生きた人間のからだだけが流れ出るのをとめられる。その人は自らの意志で自らのからだを提供しなければならぬ²」と書かれた黄金の板が発見される。王子は、自らの体を犠牲にすることを申し出る。王子が湖の穴に両脚、両手を差し込んで穴をふさぐと、た

¹竹野一雄著『想像力の巨匠たち』彩流社、2003年、P.197。

² G. マクドナルド著／吉田新一訳『金の鍵』筑摩書房、1993年、pp.107-108。

ちまち湖の水は増してきて、王子の体は湖の水に沈んでいく。王子は沈んでいきながら、王女の手から食べ物や飲み物を与えられるうち、水かさも増しついに溺れてしまう。それを見た王女は初めて大変なことが起きたことに気付き、王子を救いあげお城へと連れて帰る。懸命な手当の甲斐あって、王子は息を吹き返す。王女は王子を救い出したことにより重力を取りもどす。重力を取りもどした王女は、心も働きも取り戻し、王子への愛が芽生える。王女は地に足をつけて歩き、心から王子を愛する姿へと変身する。二人はめでたく結婚する。

3. 主人公

3.1 王女

物語の始まりは「むかし、むかし」であり、いわゆる昔話の語り方が用いられている。昔話には王女がしばしば登場する。彼女たちはしばしば物語の主人公として登場する。なぜなら、王女は誰よりも美しく、その上気立てがやさしく従順で素直な性格を持っており理想的な姿を具現している³からである。王女に何か問題や事件が起きることで物語は展開し、たいは王子が問題解決者として登場する。王子は無事王女を助け出し、難問が解決した暁に二人はめでたく結婚する、というのが昔話の典型的なパターンである。

お姫さまは何か特別なものの象徴であって、われわれの夢である美と富と名誉をもっとも完全にあらわしている。物語の中では、彼女を悩ますような義務なしに、欲望をほしいままにし、崇拜され、魔法にかけられたり、かどわかされたりして、救い出され、羨むばかりの結婚をする。お姫さまは王座にすえられるにふさわしい古典的人物であり、(中略) 畏敬や愛や熱狂的献身を引き起こさせるような神秘的な何かを持っている⁴。

それ故、王女は昔話の中で主人公として重要な役割を担うのである。昔話に出てくる類型的なこの王女のイメージは、*The Light Princess* にどのように投影されているであろうか。重力を奪われた王女は、高笑いを繰り返すばかりである。思いやりというものを出すことのできない王女は、内面的な美しさという点では、類型的な王女とは対極にあるといえる。だが、これほどまで嘲笑的な笑いをくりかえす王女でありながら、*The Light Princess* の王女には、どこかに可愛らしさを感じさせるものがある。それは、召使の人たちをも笑いの中に引きこみ楽しませてくれる場面などに表れており、王女には笑いすぎるもののほかに困ったことはないのである。王女の姿が醜い印象を与えないのは、昔話の類型的な王女のイメージの残像があるからだといえるだろう。その残像がなければ、高笑いをする王女の姿は醜いばかりであり、王女の体から重力を奪った魔女に匹敵する醜さを呈していたであろう。だが、ここでは、王女はその内面的軽さゆえにむしろユーモラスであり、軽いなりに愛らしさを保っているのである。

「昔話の本質として、人間についていえば、王女さまのように個性の説明を必要としない類型的人物が選ばれるが、同じ物語の中で、性格が変化したり、時間の経過を描いたりすることはない⁵。」だが、マクドナルドは昔話の本質に彼独自の変容を加えた。*The Little Princess* は物語の終わりで、王女は身体的にも内面的にも劇的な変化を遂げる。王女は、王子を助けたことで重力を取りもどし、人を愛することのできる王女となり、地に足をつけて歩くようになり、何に対しても高笑いをくりかえす王女ではなくなったのである。マクドナルドは、類型的な王女の姿から重力を奪い、内面的美しさとは対極にある王女を描き出すことによって、不可視の霊的な世界を可視的に浮かび上がらせ、重力という物理学の要素を用いることで、肉体と霊とは一体のものであるということを可視化して見せたのである。この変容は直接彼のキリスト教観と結びつく。霊と有機体は生得的に合成的存在であるという彼の思想を王女に織り込むことによって、王女を変容させ、新しい物語

³三宅興子著『イギリス児童文学論』翰林書房、1993年、p.322。

⁴同上、p.322。

⁵三宅興子著『イギリス児童文学論』、p.322。

へと変身させたのである。

3.2 王子

王子は昔話の類型でいうと、困っている王女を助ける役目を担って登場する。*The Light Princess* に描かれた王子も登場の場面で、やはり国を出て従者と離れて森の中をさまよっているうちに王女と出会っている。昔話の場合、「王子が英雄的行動をしても、中心人物は、やはり王女である⁶。」だが、マクドナルドはこの類型的な王子に劇的な変容を加えた。

王女が唯一重力を取りもどせる湖の水が干上がって行くころ、湖の底から発見された金の板に次のようなことが書かれてあった。

もし、湖がなくなったら、水が流れ出た穴を見つけなければならない。しかし、その穴をふつうの手段でふさごうとしても無駄である。有効な方法はひとつしかない——生きた人間のからだだけが流れ出るのをとめられる。その人は自らの意志で自らのからだを提供しなければならない。湖は水が満ちたとき、その人の命をもらわねばならない。これ以外の何を捧げても役に立たない。国の中から勇気ある者がひとりも出なければ、そのときこそその国のほろびるときである⁷。

王子は「わたしがそれをしなければ姫は死んでしまう。姫のいない人生なんてわたしには何の意味もない。だからそれをしないで無意味な人生を過ごすよりは、それをして無意味なものを捨てることにしよう⁸。」と王子は自ら生贄となることを志願する。王女を強く愛している王子は、勇気ある者として犠牲になることを志願したのである。いよいよ湖に入って行き、王子が穴に両手両足を入れ死も待つばかりの時、王子は人々に「さあ、帰ってください⁹」という。王は既に食事を取るために先に城に帰ってし

まっており、王女は王子に請われて舟の上にいるけれども、見守ってほしいという王子の願いに対して「いま私はとても眠いのです¹⁰」と答える。一国存亡の危機にあり、しかも他国から来た王子がわが身を生贄として奉げようとしているまさにそのとき、その国の王は先に寝に帰り、王女は舟の上で眠いという。王子の、自らの体を生贄として奉げるという勇気ある行為は、他の者の行為と比較して突出しており、他の登場人物のいかなる行為をも凌駕する。王子の存在感は他のものを圧倒している。この場面に至って、王子は一気に主役へと躍り出るのである。物語の主役は王女から王子へと転換され、転換が物語の主題と結びつき、昔話からの変容が実現する。

4. 物語の場所

4.1 城、森、湖

昔話は自然界の本質を基本的な形が表わしている、というのがマックス・リュートィの昔話の本質と解釈¹¹であり、城、森、湖というのは自然界を小宇宙的に示したものと見える。昔話で背景として王家や宮殿がしばしば使われるのは、大衆のあこがれと敬愛の表れと見ることができる¹²。昔話で主人公は孤立している。森は主人公が孤立する場所であり、現実と非現実の交わる場所でもある。湖についていえば、マクドナルド自身が物語に介入して次のように説明している。

これは水が昔から傷をいやす手段に使われてきたという事実によるものかどうかは不明だが、とにかく確かなことは、姫は泳げて、しかも年取った乳母が言うように、あひるのようにもぐれもしたのである¹³。

4.2 穴

特筆すべき場所として、湖の底の穴がある。ここは、*The Little Princess* では、全存在の転換点となる

⁶ 三宅興子著『イギリス児童文学論』、P.324。

⁷ G. マクドナルド著／吉田新一訳『金の鍵』、p.107。

⁸ 同上、p.109。

⁹ 同上、p.115。

¹⁰ 同上、p.118。

¹¹ マックス・リュートィ著／野村滋訳『昔話の本質と解釈』福音館書店、1996年、p.22。

¹² 三宅興子著『イギリス児童文学論』、p.324。

¹³ G. マクドナルド著／吉田新一訳『金の鍵』、p.77。

場所であり、物語の中心をなす重要なポイントとなる場所である。マクドナルドは物語の技法として、アガペーをエロスで語る傾向を見せる。物語の重要な転換点である穴とその穴に身を沈める王子のイメージはまさにそれであろう。霊的な死と再生の転換点となる場所を、まさに生殖のイメージで描きあげたと言える。彼の想像力は、アガペーの世界を、エロスの衝撃で大きい統一への転換の原点というイメージで描いたと言える。マクドナルドの影響を強く受けた C. S. ルイスは自らのキリスト教観に基づき、死と再生のイメージを次のように述べている。

キリスト教の教説では、神はふたたび上昇するために下降する。彼は下ってくる、絶対的存在の高みから時間・空間へと下り、人類へと下ってくる。彼はさらに低く下って、胎生学者たちのいうところが正しいとすれば、女性の胎内で古代および人類以前の生命の諸段階を繰り返し、自らが創造した自然の根底・海床そのものにまで下降する¹⁴。

それはまた、あらゆる動物的生殖のパターンである。そこには成熟した完全な有機体から、精子および卵子への下降が見られ、暗い体内で、初めは、生殖されつつ、種の生命よりも物質的に劣った生命となり、やがて完全な胎児へと緩慢に上昇し、さらに意識を持った生ける嬰兒へ、そしてついに成人へと徐々に上昇していく。(中略) そのことは、私たちの道徳的・感情的生活においても同様である¹⁵。

マクドナルドは彼の想像力により、死と再生の転換点を、湖の底の穴で象徴的に描き出すことによって、彼のキリスト教的世界観を新形式の物語へと変換することに成功したといえるのではないだろうか。

5. 主題

¹⁴ C. S. ルイス著／山形和美編『C.S. ルイス著作集—文学と人間への贈り物—C.S. ルイスの神髄第2巻 奇跡』すぐ書房、1996年、p.196。

¹⁵ 同上、p.197。

5.1 聖餐

王子が王女に与えてほしいと願ったのは「ぶどう酒とビスケット」である。この食事を沈みゆく湖の中で欲しがったのであるから、単なる食事ではあるまい。マクドナルドは、自分の作品を説教壇の代わりとして用いようとしたのであるから、これはキリスト教における聖餐の「ぶどう酒とパン」と考えてよかろう。聖餐とは、

キリスト者がパンとぶどう酒をもって象徴的に食事を共にすることによってキリストの死と復活を記念する儀礼。(中略) イエスは死が間近に迫ってきたことを予知した時、弟子たちと別れの食事をし、パンを取って「これは私の体である」(マコ 14:22)、またぶどう酒を取って「これは、多くの人のために流される私の血、契約の血である」(マコ 14:24) といい、さらに「わたしに記念としてこのように行いなさい」(コリ 11:24 : ルカ 22 : 19) と命じて、自分の死後も存続する弟子たちの共同体のために聖餐式を制定したと信じられている。(中略) 聖餐式こそイエスの弟子たちに自分たちのアイデンティティを確立させ、教会を形成する原動力となった¹⁶。

王子は生贄となることを自ら志願して、湖の穴に沈んで行った。このことから、王子は、十字架上で犠牲になったイエスを想起させ、王子はイエスのメタファーであることが読み取れる。王子はぶどう酒とビスケットを王女の手から与えてほしいと願い、王女に自分を見つめてほしいと願ったのである。これは死にゆく王子が王女との契約を行おうとしたと見てよいだろう。

ここに至って、これまでメタファーとして水面下で潜行していた物語は、主人公が王子に転換することによって一気に表面に顔をもたげてくる。昔話を変容させることによって描き出した物語は、重力を奪うという物理学で語ることによって、キリスト教思想を異化することに成功したのであるが、後半で

¹⁶ 大貫隆編集『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年、p.636。

主題をむき出しのまま表面に浮き立たせた点は、問題を残したといえよう。なぜなら、これはどこまでもキリスト教の本質を語る物語だからである。聖餐は、イエスの奉献によって、キリスト者が自己の生活を神に奉げることを確認する儀式である。それが主題であるのであれば、広く一般的に語る話としては問題を残すことになるであろう。だが、彼の創作の目的が、文学による説教であったので、ここが突出してくるのはやむを得ないことではあった。

5.2 生贄

聖餐の儀式が表面に浮かび上がるのではなく、深く潜行した語りとなっていれば、高度に洗練された作品として、現在の作家をも凌駕したものとなって、その魅力を今に放っていたであろう。

聖餐というたった一場面の描写だけで、彼の作品は読み継がれなくなったものと思われる。それは、物語の主題が〈生贄〉であり、〈生贄〉は各共同体のアイデンティティに直結しているからであろう。聖餐は、キリスト教において〈生贄〉となったイエスとの契約を確認する祭祀である。祭祀が主題となっているところにマクドナルドの作品が時代を越え地域を越えて受け入れられない要因があるのだろう。

祭祀とは人間がその神々に捧げる能動的な関係である。祭祀においては（中略）神的なものへの直接の働きかけが行われるのであり¹⁷、能動的な人間のふるまいこそが、神話の主題の源泉であり、それらの主題に顕在的に現れているものなのである¹⁸

祭祀と儀礼とが明確に形成されればされるほど、いっそう明らかに供犠がその中心を占めることになる。供犠はさまざまな形式で、つまり供物としての供犠、清めの供犠、願いの供犠、感謝の供犠、贖罪の供犠などとなってあらわれる。宗教的信仰はこの供犠において真の可視性

を獲得する¹⁹。

各民族各共同体にはそれぞれの神話があり、祭祀は共同体の生命活動の根源において営まれ、歴史の中で繰り返されるのである。それは共同体個人、個人のアイデンティティを形成する。故に、マクドナルドの作品がたとえ魅力的な作品であったとしても、主題となる一場面が儀礼と直接結びついて語られる以上、読者がキリスト教徒でなければ、読者側のアイデンティティが無意識的にでもそれをふるいにかけるのであろう。なぜなら、キリスト教は、すべての出来事がイエスによって転換されるという思想であり、その思想が主題として頭をもたげてくると、他の宗教的アイデンティティが否定されるからである。故に、キリスト教における宗教的儀礼が主題として語られる場合、水面下で潜行して物語られる方が、時代を越え、地域を越えて受け入れられやすくなるものと思われる。

6. 物語技法

6.1 科学的表現

マクドナルドの大学での専攻は自然科学であり、アメリカでの講演も「主題は化学と物理学を含むものであった²⁰」ように、科学への関心は非常に高かった。王女から重力を奪うという発想も、科学への関心の深さを示しているといえよう。彼の物語の技法の一つは、科学的要素・表現・用語を用いて、不可視の内面を可視的に描写することにある。王女の体から重力が奪われると、もの事を感じる魂も奪われるということが、体が軽くなるという現象によって無理なく感知できる。重力という物理学の用語一つを用いることで、王女の総体的な軽さを感知させたのである。

小さい王女はその体から重力を奪われることによって、C.S.ルイスのいう、人間の合成的性質を象徴的に表わしたものと思われる。

私たち自身の合成的存在は一見純然たる異例

¹⁷ E. カッシーラ 著／木田元訳『シンボル形式の哲学（二）』岩波書店、1994年、p.411。

¹⁸ 同上、p.412。

¹⁹ 同上、p.414。

²⁰ 竹野一雄著『想像力の巨匠たち』、p.196

のようだが、決してそうではなくて、神がそのように人間の霊の内にまで下り、人間の霊はまたそのように自然の中へ、そして私たちの思考も同様に感覚や情熱の中へと下って行くとすれば、さらにまた大人たちの心が（最も善良な心に限られるが）子どもたちへの同情へと下り、人々が動物たちへの同情へと下って行くとすれば、万物は符合し、私たちが生きている自然・超自然を含む全実存界は、以前思っていたよりはるかに多様かつ微妙に調和していることになることを、理解できるのである²¹。

人の死は、刑罰的死を永遠の生命へと転換するための手段である。死が恵みであるのは、謙虚にかつ喜んで死に対して自己を放棄することによって、人間は彼の反逆行為をご破算にし、永遠に善なるまた最高の生命の不可欠の要素である高次の神秘的死の一例証へと転換するからだ²²とルイスはいう。霊的な死と再生のパターンは自然界の死と再生のパターンと類似しているならば、死を経て生まれ出でたばかりの王女の魂はいと清らかなものであるといわねばなるまい。そのいと清らかな魂の王女の体から重力を奪い、王女の内に霊と有機体との不調和をもたらしたのである。それだけに痛ましくもあり、愛らしさも禁じ得ないのである。マクドナルドは、あえて小さな王女を変容させることで、人間が生得的に合成的存在であることを、痛ましくも愛らしく描き出し、読者に深く印象づけたのだと言えよう。

6.2 非合理的表現

マクドナルドは、科学的要素を用いて霊的世界を語るのであるが、表層で語られる科学的表現はしばしば非科学的な描写に陥る。非科学的な描写で読者を混乱させる場面もある。読者はおそらく首をかしげながらも、マクドナルドの想像力による筆の勢いで読み進めてしまうのであろう。

王子は穴を見て、方法は一つだけだと分かった。彼は石に腰かけた状態で両あしを穴に差し込み、体を前に倒して、まだあいているすみを両手でふさいだ。そのような居心地の悪い状態で、運命を待つことにした。そして、人々の方をふり向いて……²³

この姿勢を現実的に体現して見ると、体をかがめて穴に両手を差し込んだ時点で、頭は下方に垂れ下がり、頭をもたげて振り返るということはもはや身体的に困難であることが分かる。だが、この非合理性が却って、王子の行為の深刻さ異常さを浮き立たせ、周囲の人々との落差をいやがうえにも感知させるのに効果を発揮している。

身体的に不思議な場面はまだ続く。二時間、三時間、四時間と水につかり水かさが増してくる中で、王子は「その前にぶどう酒を一杯とビスケットを一枚くださいませんか²⁴」と、王女に要求する。この状態で人は飲食を欲するだろうか、また、飲食できるだろうか。更に、「水は王子の首まできた²⁵。」というが、水が首に来た時点では、もう顔全体が水の中に沈んでしまっていなければならない。話など出来るはずがない。だが、王子は王女に「姫、キスをしてください²⁶」「わたしは幸せに死ねます²⁷」と、キスまで要求するのである。

身体的にはあり得ない描写であるが、あり得ない非合理的な描写だからこそ不思議な魅力を放ちながら、現実的な臨場感を呼び起こさせるのである。非合理的であるからこそ、大変なことが起きている、王子の覚悟は尋常ではない、ということが臨場感をもって迫ってくるのである。これが、単に合理的に描写されているのであれば、それはただの現実描写に終わってしまう。ただの現実描写では、異常な事態、何かが起きようとしているという底知れぬ劇的な事態を心の奥深く感知することはできないであろう。マクドナルドは、意図して非合理的に描いてい

²¹ C.S.ルイス著／山形和美編『C.S.ルイス著作集—文学と人間への贈り物—C.S.ルイスの神髄第2巻 奇跡』p.195

²² 同上、p.226

²³ G. マクドナルド著／吉田新一訳『金の鍵』、p.114。

²⁴ 同上、p.119。

²⁵ 同上、p.120。

²⁶ 同上、p.121。

²⁷ 同上、p.121。

るのであり、この非合理的描写で霊的世界を語る筆力こそが、マクドナルドの想像力の特質だといえるだろう。

6.3 性的表現

マクドナルドは物語の技法の特質として、アガペーをエロスで語る傾向を見せることは、先に、3.3の穴の項目で述べたとおりである。マクドナルドは、性的描写で霊的世界を物語るののであるが、C. S. ルイスも述べている通り、生殖のパターンは死と再生のパターンであり、マクドナルドにとって、性的表現は、人間の合成的存在を最も根源的に示すにふさわしい手段であったのではなかろうか。では、なぜ、性的描写が時に受け入れがたいものになるのであろうか。もともと人間は霊と有機体との合成的存在であるなら、性的描写を卑猥と受け取ることはできないはずである。性的描写を卑猥と受け取るのは、霊と有機体とが争いを起こしているからに他ならないというのがルイスの説明である。

人は霊と有機体との合成的存在である。人々は、卑猥な冗談を言う。彼らは死んだ人間を気味悪く感じる。卑猥な冗談は、人間は自己の動物性を好ましくないもの、もしくは滑稽なものと感じていることを示している。霊と有機体との間に争いがなかったとしたら、どうして人間はそう感じるのか。それはまさに二つのことが和合していないことの何よりの証拠である²⁸。

7. 転換

The Light Princess の主題はイエスの〈生贄〉であり、キリスト教の本質である。イエスの生贄によって、旧約聖書の物語は新約聖書の物語へと転換された。転換をキーワードに考えるなら、19世紀のマクドナルドも、民話や伝承から新しい物語形式への転換を行ったと見ていいだろう。それは「彼が想像力

の性質とその機能について、独特の見解をもっていたからである。(中略) 真理はまず想像力と直観によって受容され、そのあとで理性的に理解されると彼は考えた²⁹。」彼の想像力は、彼の故郷、スコットランドで培われたものであり、スコットランドはケルト気質の残る土地柄である。

イエスもヨハネの集団から離れて、一人ガラリア湖に向い、神の国運動を始めた。王子も森の中で孤独にさまよっているうちに、王女に出会った。マクドナルドは、イエスでも王子でもないが、辺境性という点では、類似している。彼は、教区民たちの否認によって牧師職を追われ、教会から離れて一人になった。また、彼の故郷スコットランドはイングランドから見れば、北の果てにあり、イングランドとの戦いで独立を勝ちえなかった歴史があり、マクドナルド家はグレンコーの虐殺の生き残りのマクドナルド氏族の末裔である。スコットランドには19世紀初頭、彼の幼少期にもまだケルトの民話や神話は残っており、彼はそれらを聞いて育っている。熱心なキリスト教徒ではあったが、彼独自の想像力は彼の古層に横たわるケルト魂から呼び起こされたものかもしれない。マクドナルドの息子の Greville は、父親の伝記 *George MacDonald and His Wife* を著したが、その中で、ケルト人の想像力について述べている。

The Celt is imaginative above all things, and so tends towards extravagance: but always with restraint, and so with no vanity.³⁰

Greville は、ケルト人の想像力はあらゆることに亘って豊かであり奔放であるが、慎み深くもあると述べている。それは、キリスト教が布教される以前の古代からの民族の魂でもあろう。超越的な神との対話をもとめる人間の精神的な想像力の働きは根源的に変わらないであろう。彼の想像力はそのケルト魂と無意識にも呼応していたのではないだろうか。それは、根源的であるだけに性的描写をも刺激するものとなったのではあるまいか。人間の根源的な魂

²⁸ C.S.ルイス著／山形和美編『C.S.ルイス著作集－文学と人間への贈り物－C.S.ルイスの神髄第2巻 奇跡』p.223。

²⁹ 竹野一雄著『想像力の巨匠たち』、p.198。

³⁰ Greville MacDonald: *George MacDonald and His Wife*, JOHANNESON, 2005, p.77.

の働きと、科学的な嗜好とが共存して、彼独自のキリスト教観となって発酵し昇華し作品として結実したのではなかろうか。

(Received: September 30, 2010)

(Issued in internet Edition: November 1, 2010)

おわりに

マクドナルドは昔話の類型のお姫様物語を変容させて、キリスト教的世界観を織り込んで新しい物語を創出した。霊という非合理の世界を重力という物理学を用いて描き出したその想像力には非凡なものがある。*The Light Princess* は、マクドナルドの非凡な才能が見事な形で結晶した作品といえる。だが同時に問題も含んでいる。宗教的儀礼、特にキリスト教においては、すべてがイエスにおいて転換されるという宗教儀礼であり、それが物語の主題として表面に出てくる場合、読者は遺憾ながら限定されてしまいがちである。霊的世界を可視的に表現するマクドナルドの想像力や表現力には非凡なものがあり、限定された読者だけのものにしておくのは残念なことである。彼の作品が時代を越え民族を越えて読み継がれるためには、彼の最も表現したかった部分をこそ、その想像力や筆力で異化した物語にすることが必要であったと思われる。

テキスト

George MacDonald: *The Complete Fairy Tales*, Penguin Books, Penguin Group (U.S.A.), 1999.

引用文献

大貫隆・他編集『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年

カッシーラー、E 著／木田元訳『シンボル形式の哲学（二）』岩波書店、1994年

竹野一雄『想像力の巨匠たち』彩流社、2003年

マクドナルド、G 著／吉田新一訳『金の鍵』筑摩書房、1993年

三宅興子著『イギリス児童文学論』翰林書房、1993年

ルイス、C. S.／山形和美編『C.S.ルイス著作集－文学と人間への贈り物－C.S.ルイスの神髄第2巻 奇跡』すぐ書房、1996年